第１７６号

ＳＯＳニュース

城めぐりのすすめ

「城」というと皆さまどんなイメージを持たれるでしょうか？　姫路城に代表されるような白亜の天守を持った壮麗な城。それとも関東で言えば身近な江戸城、小田原城等々。日本城郭協会が選定している『日本 100 名城』、『続・日本 100 名城』などもあります。

実はいま戦後何度目かの「城ブーム」です。落語家や歌舞伎役者がナビゲーターをやったり、映画俳優やタレントさん、さらには戦国ギャル、お城ギャルなる奇怪な人たちも現れたりしています。そんな環境の中、私は「城のご案内」(コンシェルジュ、ナビゲーター)や「街道歴史旅」などを時折りやっています。

日本全国で約 4 万とも 5 万ともいわれる国内の城ですが、私はそのうち約 1,800 カ城ほどを見て回わり、好きな城には十数回も行ってしまったりしています。

城に行くといつも――「誰が作ったのか？」、「いつごろ？」、「設計(縄張り)は？」、「何のために？」、「その築城や破壊の歴史は？」、「この城は実際に戦乱に巻き込まれたのだろうか？」・・・といった具合で、疑問符はいっぱい付きます。

今のめり込んでいるのは中世の城。まさに戦国の世に様々な英雄豪傑が互いに鎬(しのぎ)をけずり、知能と戦術と謀略の限りを駆使して隣国を侵略し、強大な権力を手に入れてゆきます。その過程に幾多の城の攻防が繰り返され、そこに“歴史のロマン”を感じます。

戦国の世はまさに“歴史のロマン”が満載です。

つい先日訪城したのが、何度目かになる中国地方日本海側の萩城、津和野城、松江城でした。萩城といえばどうしてもその城主・毛利家の歴史を知ることが必須科目になります。「関ケ原の戦い」では時の当主毛利輝元が、西軍の主要メンバーの要請を受けて大阪城に乗り込みます。関ケ原には輝元の名代、つまり毛利軍総帥として毛利秀元が南宮山に陣取ります。関ケ原の戦いは皆様ご存知のとおり徳川家康率いる東軍の勝利に終わり、毛利氏、長束正家、安国寺恵瓊らは戦わずして敗走。毛利家は 8 か国あったその諸領を防長 2 か国（周防国と長門国）に減じられて萩城に逼塞させられます。毛利家の本領安堵を願い“良かれ”と思って結果的に苦渋の選択となった吉川広家の苦悩を思ったり、あるいは幕末に爆発した長州勢の活躍を考えたりすると、明治維新がここから始まったという感慨とともに、歴史のからくりが面白く感じられるのです。さらに萩城そのものの存在や、いまでも江戸時代の地図がそのまま使える萩城下町の佇まいが、わたしたちを江戸時代にタイムスリップさせてくれます。

一方、津和野は盆地に囲まれた小さな城下町です。ここの城は山の上。麓から累々とした石垣が見えます。掘割に鯉が泳ぎ、ナマコ塀や武家屋敷跡が続く静かな小京都といえます。さだまさしが歌った『案山子』はまさにこの城跡から見下ろした際の心情を描写したもの。「♪元気でいるいか　街には慣れたか　友達出来たか　寂しかないか　お金はあるか　今度いつ帰る・・♪」と都会に出て行った息子の身を案じる親の心情（実は弟を気遣う兄の心情）を見事に表現しています。ときおりＳＬが山間を走るのもこの地です。

そして次は国宝・松江城です。昭和 12 年(1937)に確認されて以来所在不明だった 2 枚の祈祷札が平成 24 年(2012)に再発見され、天守内の痕跡調査により地階の柱に打ち付けられていたことが明らかになり、平成 27 年に国宝に指定された天守です。現存する 12 の天守のうち５番目に国宝に指定されたのです。こんなこともあるのだとあらためて現存天守の凄さを感じるところでもあります。風光明媚な土地柄に、石垣や堀、天守と城下町のたたずまい、美味しい和菓子、茶道、地産の名物、地酒・・・と喰いしん坊にはたまりません。城巡りは総合芸術が味わえます。

人生はいつも順風満帆な時ばかりではありません。ときにはつまずいたり、悩んだりすることの方が多かったりするものです。そんな時にも「城めぐり」は良い気分転換になります。なによりも実際に身体を動かし、新しい空気を取り入れることで、新しい発想が得られるきっかけになるかもしれません。

知識や教養のためだけでない、“心の洗濯”のための『城めぐり』をぜひお勧めします。

２０２４年７月
ＳＯＳ総合相談グループ
家庭・教育部会、相続・遺言部会
香取　昂宏
（元東京家庭裁判所家事調停員
元 NHK 文化センター講師）

「ひとりで悩む前に」お気軽にご相談ください。